
はじまる恋。

栄華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまる恋。

【Zコード】

N1727X

【作者名】

栄華

【あらすじ】

体育祭・バレンタイン・クリスマス etc . . .
いろいろなお話を各話3話程度で、

書こうと思っています。

R15がどこまでなのかよく分からぬので、
保険です。

拙いですが頑張って書こうと思つてます。

(意見や指摘Welcome!!ですので、
そちらもよろしくお願いします。)

体育祭――！？

バ
ン

ピストルの音が鳴り響く

そう、今田は体育祭だ。
私、鈴宮杏は応援席の一番前を陣取つて
あの人があるのを待つていてる。

黄色い声援が最高潮に達したアンカー。私は自分のクラスよりも、黄色いゼッケンに黄色いハチマキのあの人には釘付けだ。

運動神経が良いのもみんな知ってるし
何よりかっこ良くて優しいあの人は
私にとって高嶺の花なわけで…
だけど私が彼を好きなことは、
なぜか女子の中で有名らしい。

最後のカーブ。

私達の前を通過すると声援はもつと大きくなる。

私はただ手を祈るように握つて通り過ぎるのを見送つた。

「高峰くんかっこ良かつた！」

「だよね～！！」

と、おひるの声がある。

「高峰くんかっこ良かつたね。」

次は隣の陽子が同じ言葉を私になげる。

「うん…かつこ良かつた…」

体育祭は好き。

かでここに高嶺ぐんを詠も懲しみことなく茶化すこともなく見れるから。

でも、なんだか芸能人のように妻へ遠い人のような錯覚がするから。

如上文二

見事高峰くんのクラスは高峰くんのおかげで逆転一位になつた。

高峰くんは嬉しそうに笑つて

遠いけれどよく分かる。

私は彼の笑顔が好きだ。

笑ってくれるだけで嬉しくなる。

あまり話したことないけれど…。

~~~~~ \*

あれから私もリレーが終わって  
次は借り物競争が始まった。

私達はもう出る種目は終わって  
フリー タイム。

陽子とたわいもない話で盛り上がり  
ケラケラ笑っていると。

「ごめん、鈴宮借りてもいい??」  
という声がする。

振り返った瞬間もう腕を捕まれていって。

「…え??」

驚いて捕まれた腕から田線を上げていくと…

後ろ姿でも分かる。

…高峰くんが私を引っ張っていた。

# 体育祭――！？

あまりの衝撃に言葉も出ないまま、連れてこられたのは朝礼台前。

いきなり腕を掴んでいた手が、  
私の手を裏側二絡めて（谷二）

「え」

「お題は？？」

高峰くんが進行係の人間にマイケを向けられた  
手を目を見開いて凝視していた私はその絡められた手が上がるま  
ま

高峰くんは私の顔を見たまま  
私も目線を上げる。

二組高峰瞭と一組鈴富呑です。お題は

”彼女”です。」と言つた。

女の子の悲鳴にも似た叫び声と、  
男の子の冷やかしの声も私には聞こえなかつた。

…私と高峰くんだけの世界みたいに  
私にはほほ笑む高峰くんしか見えなかつた

「うわっ。手をつなぐだけじゃダメ?..?」

「ダメです。もひゅうひと頑張って下さい」

横顔から正面になつた高峰くんが、

近づいてきて反射的に俯いた私にキスをした。

…と、見えるように顔を近づけて、

「田[瞑つて「と小声で言つ高峰くんの言葉通り  
恥ずかしくつて田をギュウッとじた。

離れて行く気配でそつと田を開ける。

「長かつたですね~。(笑)

「はいっ。ありがとうございました~。」

そうじつてまた引っ張られたまま、  
一位の座る位置に座ると、

「「めん。今日は口裏合わせて。  
と、小声で言つてきた。

やつと意識が回復した私は「高峰くん彼女他校だったっけ?..?」と、  
彼女が居るという噂があつたから  
聞くと。

「え?..?彼女?..!居ないよ。」

「え？！凄い噂になつてるよ？雅之とかが高峰くんがずっと想つてる人が居るつて言つてたし。」

「…彼女は居ないよ。」

「それにしたつてもつと可愛い子連れてきたら良かつたのに…。」

「え？？」

「だつて私がたまたま田に入つたから連れて來たんでしょう？」

「何も聞きたくなくて、

「なんかごめんね！…」

と、笑いとばそうとするのに高峰くんは笑つてくれなかつた。

「高峰くん？？大

大丈夫と続くはずだつたのに

「おいつ…そこイチャイチャすんなよ…。」と、うるさい雅之が隣に座つたから言えなかつた。

「は？！イチャついて…な…。」

内緒話をしていたせいいかピッタリとくつ付いていた。

「「「」めん！…」

急いで離れると隣で爆笑する雅之をキッと睨む。

その先に居た駿を見つけて

「？？雅之のお題何だつたの？？」と、聞く。

「モノマネが上手いやつ。」

と、聞いて

「えーっ駿のモノマネ見たかつた！？」

「しかも新作だぜ？？」

「えーっ駿お願いもつ一回して……お願いっ……」

駿は咳払いをしてちょっと古めの芸人の真似をした。

…私と雅之は大爆笑

「お前ほんと似てるか似てないか微妙だよな……」

「ほんと……しかも古つ……」と一人してヒーヒー言いながら大爆笑。

「その割に笑つてるじゃねーか……」とふてくされ氣味に駿は言つ。

あまりに笑い過ぎな私達は注意されて  
只今小声で会談中。

「駿と雅之つて勿体無いよね。」

「は？…」「へ？？」

「だつて雅之は意地悪だし、駿は天然だし。」

「お前・（杏）には心配されたくない。」

「え？？なんで？？」

「だつてお前制服のまま寝るしな。」

「確かに～」

「なんで部屋はいつてんの？！」

「毎日宿題写してんの。それで俺何回布団掛けてやつたか…」

「俺も…」

目元を押さえて泣き真似する一人を叩く。

「しかも杏パジャマも持つていかないで、  
お風呂入つてバスタオル巻いて出でへる…」

「あつ！…それ俺も見た！…あれは目に毒だよな  
と、駿も雅之もまた泣き真似をし始めた。

「はあ？！ほんとムカつく！…それなら雅之だつて駿だつて  
お風呂上がりいつもじゃん！…私が何回着替え持つて行かされた  
か…」

私も一人と同じように泣き真似をすると  
そのタイミングで退場の音楽がなり始めて、  
私達は急いで退場門から出て行つた。

その後ポロッと言つた言葉が雅之と駿の逆鱗に触れたらしく

一人に挟まれて腕を掴まれ連行されている途中。

前を歩いてた高峰くんが女の子に囲まれていた。

囲まるのはいつものことなんだけどいつも笑ってる高峰くんが、無表情でなんだか怖かつた。

「なんで高峰くん怒ってるんだろう？？」

私の頭上で意味ありげに目を合わせた雅之と駿には気づかなかつた。

# 体育祭――！？

あつという間に終わつた体育祭。

借り物競争の後は混乱した顔の陽子と、どういうことか意見を求める女子の大群に囲まれて大変だったけど、とりあえず笑つてやり過ごした。

（当事者の私も分かつてないの！）なんていう心の叫びは誰も分かつてないだろうから。

一  
あ  
あ

そんな私は雅之と駿を待つて いる。

静まり返つた私だけしか居ない教室。

夕田に懲りられるグラント。

窓側に近寄って景色を見る

「終わっちゃった。」

私は毎年こいつやつて外を見てしみじみする。

小学校の頃から運動会は幼なじみの雅之と駿と私の家の三家族で食

それも私が一人のご飯を作るようになつてからは、  
私達三人で行くことに変わつたけれど。

下を見るとサッカー部はテントを運んでいる。

（まだ終わりそうにないな。）  
そつ思つて席に座る。

ガラガラガラ～

「鈴富？？」

扉が開いて入つてきたのは高峰くんだった。

「あれ？？陸上部は終わつたの？？」

「うん。」

「早いね～」

「…誰か待つてるの？？」

「うん。雅之と駿を待つてるんだけど、  
見て。サッカー部全然終わらなさそつだよ。」

「…鈴富つてあの二人と仲良いよね。」

「うん、まあそうだね。幼なじみの上に小学校の入学から  
一度もクラス離れたことがないから。」

と、笑う。

そう、生まれときからずつと一緒に。

最近は家族よりずつと一緒に居る。そんなことが今更いそばくなつた。

「なんていうか…もう家族…もし両親が死んでも凄い悲しいけど、それよりもっと悲しいぐらい大切で必要不可欠。」

「じゃあ…好きなの…？」

「まさか…でも、家族としては凄い好き。」

「…そつか。」

なんだか不思議な気がした。

好きな人がこんなにも近くに居るのに、普通に話せることが。

去年は委員が一緒に業務連絡ぐらいしか話せなかつたはずなのに。

「…じゃあ、や。

…俺のことは…？」

「へ? ?」

昔にタイムスリップしていた私はいきなりの発言に目を見開いた。

「俺は…去年からずっと鈴宮が好き。」

強い眼差しで私を見てそう言った。

「だから…今日の借り物のとき鈴宮を連れて行つた。」

強い眼差しはあつとも戻りやれることなく、  
私だけを見ている。

「…ほん…と…」

やつと言えた言葉は弱々しくて情けない言葉だつた。  
けれどそれが会話のように疑問が沸いてきた。

「だつて高峰くんは学校のアイドルで、  
モテるの?」

「俺つて学校のアイドルなの?」(笑)

「うふ。だつてなんでも出来るから…」

「それは鈴宮の前では格好いい姿で居たいから頑張つただけだよ。  
…それにモテるつて言われても鈴宮が好きになつてくれなかつたら、

全然意味ないじゃん。」

「…ほんと?」

「ほんと。じゃなきや、あんな大勢の前で連れて行かない。」

「じゃあ、どうして私なの?」

「どうして…んー。入学式で一皿残して、話しても見てても楽し  
かつたから。  
もつと好きになつた。」

「…」

あまりに意外な発言に恥ずかしさで固まつてごめんと、  
「ねえ、あまり焦らわれたくないんだけど、  
…返事聞いてもいい??」

「…」

「鈴宮?..?..」

「私も…」

そう呟くのが精一杯だった。

「ほんと?..」

耳まで赤いであの紅い顔を口クロクとらぬ。

「じゃあ…付れ合つてやせー。」

「…はー。」

そう言つて上田で高峰くんの顔を見ると、  
綺麗な笑顔で私を見ていた。

「じゃあ、ほんとにして良こよね。」

「え？？」

顔が近づいてきた。

体育祭と同じでうつむいた私の前で高峰くんは止まった。

高峰くんと田が会つ。

私はゆっくり瞳を閉じた。

体育祭と違うのは、ほんとに触れたこと。

「瞭～」

高峰くんを探す声で私達はゆっくり顔を離す。

「抜け出しきたんだった」と笑う高峰くんは、  
私を見つめてこれで彼女だつてみんなに言つてもいいんだよね。と  
満足そうに言つた。

「えっ！…みんなに言つの？！」とアタフタして私の頬にキスをして

「言わなくとも顔に出るかも」とちよつと意地悪な顔をして  
行かなくちゃと言つて教室を出て行つた。

私の彼は学校のアイドル。

ずっと周りに居る少女Aだつたけど

私を見つけてくれたみたい。

私の彼は学校のアイドル。

みんなが羨む学校のアイドル。

## 記憶喪失？

「竜也！…ねえ、竜也！…」

「大丈夫！…体に異常はなかつたつて先生が仰つてたから。」

「じゃあ、どうして目が覚めないの！…」

暴れまわる私を朋美はしつかりしなさい！…と大声で私を叱つた。

「今は由香が側に居てあげないと…！結婚するんでしょ！…しつかりして、竜也君の側に居てあげて！…」

朋美の説得もあつてか私は大分落ち着いた。

ここは病院。

私の婚約者の野田竜也がバイクで事故に巻き込まれて、意識不明。一命はとりとめたけれど目を覚まさない。

竜也の両親はアメリカに住んでいらっしゃるから、私とか竜也の友達しか居ない。

私は竜也の手を握つてただひたすらに祈つていた。

朝がやつてきた。

生きているけどまだ目を覚ましそうにない。

2日目。

事故が起きて3日目。

私は3回田の神社を訪れていた。

チャリン

こういう時、何円入れて良いか分からなければ、小銭を入れる。

神様。

私と過ごした日々を忘れても良い。

竜也が私を好きだったことも忘れても良い。

私自体を忘れても良い。

お願ひだから目を覚ませて下さい。

お願ひ竜也を連れてかないで。

お願ひ…

ギュッと田を閉じて胸の前でもう一度手に力を入れて強く握る。  
そして神社を見つめて竜也の居る病院に向かう。

そんな日々が続いていた。

本当はずっと側に居たいけど、

竜也の友達が私と変わると言つて、

無理やり私を家に帰すからそんな生活を送つていて。

神社を出てすぐタクシーを拾つて病院へ向かう。

携帯がなつた。

「非通知」

出たくなかつたけれど鳴り止む気配もないのと、  
恐る恐る電話に出た。

「…もしもし」

「由香りや こ？！竜也意識戻ったよーー。」

「え？ーーーすぐ行くーーー。」

セツの言つた私の田の前にま、 もつ病院が見えていた。

「竜也ーーー。」

「あつ、 由香りやんーーー良かつたね。」

竜也田覚ましたよ。」

「竜也？？？」

「…」

「竜也？？？」

「… お前誰？？」

「竜也なに言つてんだよーーー。」

「裕也の知り合いか？？」

「竜也ーーーおまつ「ここの」

「由香りやん？ーー。」

「『』めん竜也裕也君借りるね。」

私は竜也の友達の裕也君と病室を出る。

「裕也君。もういいの。

…私ね、さつき願掛けしたの。竜也が田を覚ますようひつて。私を忘れても良い。私と過ごした日々を忘れても良いって。だからもういいの。」

どうしてこんなにも冷静なのが本当に分からぬ。  
だけどなんだか竜也が”田を覚ました。”  
もう、それだけでいいと思えた。

でも…!とまだ裕也君は食い下がつてくれるけど、  
私が笑うと納得してないけど分かつてくれた。  
きっと私はちゃんと笑えてない。  
分かつてた。

「裕也君。竜也に私のこと話さないで。」

そう一方的に約束させて私は病室に入ることなく  
そのまま家へ向かった。

まず、私が先にしたのは竜也の家へ向かつて私物を全部持つて帰つたこと。

ただ、左手にある婚約指輪は私の引き出しだと貸してくれていた、  
引き出しここにしまつた。

竜也は指輪を結婚指輪じゃないからと言つてつけてなかつたか大丈  
夫だ。

作業をしていたら、ふと神社に行こうと思つた。  
ちゃんと私の願いを叶えてくれたから。

普段神様なんて信じてもないくせに、元  
勝手だよねなんて思つて小さく笑つた。

悲しくなかつた。

ただ、生きてて良かつた。  
目を覚ましてくれて良かつた。

誰か優しい神様か何かが悲しいとか、  
涙とかの神経を麻痺させてくれたみたいだ。

## 記憶喪失？

久しぶりの自分の家はなんだか何かが足りないような喪失感が漂っていた。

ソファーに座つてみたつて、  
テレビを見てたつて、  
料理をしてみたつて。

何か違う。

しかも俺つて料理が恐ろしく出来ないみたいだし。  
今作つたのだつて”卵かけご飯”だ。  
あまりに料理が思い浮かばないから  
記憶喪失かと思つたぐらいだ。

（一体どうやって生きていたのだら？…）

自分の家の空き部屋も分からぬ。  
物置つてわけでもなさそうだし…

最近何かが大事な何かが抜けている気がする。

ふと目に付いた引き出し。

何時もは開けないし開けてはいけない氣までするのこれ、  
今日は開けたくなつた。

ちょっと勢いよく開けた引き出し。

「ロン

出てきたのは指輪だつた。

「？？」

透かして見てみる。

自分の指には入らなむそつだ。

「誰のだ？？」

しばらく指輪を眺めて

まあ、いつかと言つてなおした。

これをきっかけにあちこちに人の気配があることが分かつた。

料理の本には誰かの字でアドバイスが書いてあるし、カレンダーには明日にシリシが付いていた。

よくよく見ると対になつてゐるお皿にマグカップ。

自分の部屋に行つて引き出しを開ける。

「ほんとに入つてた…」

パツと思い出したのは部屋の引き出しを開け閉めしてやたらと嬉しかつたことだつた。

綺麗にパッケージされた”ソレ”は有名なジュエリーショップの物だった。

### 十中八九指輪。

レシピに指輪。カレンダーも机に並べようと取りに行く途中、

バサッ

下に置いてあつた箱を蹴った。

「はあ……」

派手にばらまいた中身をなおそつと思つて手に取つた本の隙間からはみ出していたものがあつた。

「？！」

どうして忘れてたんだろう。

どうして言ってくれなかつたんだろう。

どうして…忘れてたんだろう。

これが怒りなのか悲しみなのか分からぬ。

これが自分に対する怒りなのか、

他人に対する怒りなのかさえも分からぬ。

シルシの付いたカレンダー

アドバイスの付いたレシピ

出てきた指輪

ラッピングされた指輪

庄へ来た[写真]

空き部屋

喪失感

「なんて馬鹿なんだろ。」

全てに繋がるものは一つしかないの。」

## 記憶喪失？

「殴つてくれ。」

実家に帰る途中。  
後ろから腕を引っ張られ、悲鳴をあげる間もない私の上からそう声  
が降ってきた。

掴まれた手首から目線を上げると竜也が居て、  
すごい怒っているような、  
それでいてかなしそうな顔で私を見ていた。

「頼む。

腕を振り払つてもいい。  
顔も見たくないと罵つてもいい。

怒鳴つてもいい。

…頼む。俺を拒んでくれ。」

「…どうして…？」

「もう俺は婚約者とは言えない。」

「…記憶が戻ったの？！」

「ああ。」

「そうなの。

…元気そうで良かつた。

それに怒つてないよ。

だつて、私が願つたんだから。」

「？？」

「私が忘れてもいい。つて神様に願つたの。  
それのおかげか記憶と引き換えに竜也は意識が戻つた。  
それで良いと思つたの。」

「…なんて言つても竜也にはわかるんでしょうな。」

竜也は私をよく分かつてゐるから。

「…やつて言つてる今も顔を見れない弱い私も。  
素直になれない私も。」

愛情表現が苦手な私も。

よく知つてゐるから、私の気持ちなんてすぐ分かつてゐる。

寂しかつたなんて言わないよ、  
寂しいなんて思わないよ。」

ここ何日も必死に働いて、何も考えないよ、無理にお酒も飲んだ。  
でもね、お酒つて肝心なことは忘れさせてくれないから。  
肝心な時は酔わせてくれないから。

「…もう思い出さないと思つてたのに、  
指輪を置いていったのは、  
それでもやっぱり思い出して欲しかつたから。  
最後に迎えに来てほしかつたから。」

「ズルいでしょ。  
やっぱり竜也も心も欲しかつた。  
神様にお願いして叶つたけど、

叶つて欲しくなかつただなんて思いそつた自分が怖かつた。」

「…今までのことを見れたら、

もつそれは”俺”じゃないよ。」

竜也はちよつと間をとつた後、そつ私に言つた。

「由香を好きだつた。

由香を好きでいる俺を忘れたら俺じゃないよ。」

そつもつ一度言つて、手を離した。

「だから、結婚してよ。」

「？！」

驚いて顔を上げた私の頬を両手で包んで、

「由香を忘れた最低なやつだけど。

由香なじじや生きていけないみたい。

…だから、結婚してよ。」

記憶喪失でも思い出すぐらじ由香が愛してゐみたいだし…?…と笑う

竜也に、

「まあ、竜也には私しか居ないもんね…！」と返した私はほんと愛  
情表現が下手だ。

それでもきっとこの人はその奥の気持ちを分かつてくれる。  
それは指に光る指輪より確かなこと。

その後、思い出した経緯を聞いた。

「で？？どんな[写]真だったの？？

「え？、[写]わなきやダメ？？」

「やいしー『真じやなこ』よね？！」

「…」

「…ひよひよ…」

「…寝顔だよ。」

「…？…変態…没収するから出して…」

「嫌だ…」

「ちよひと壇せり…」

でも、結局没収しなかった。

だって思い出すきっかけだもんね。  
[写]真さんありがとうね。

## 眼鏡と不良？

私は俗に言つ、”陰キヤ”だ。

陰キヤは陰口の上等文句だし、  
でしゃばるとすぐに”陰キヤの癖に”と言われる。

でも、陽キヤと陰キヤの違いなんて  
誰が決めてどう分かれてるわけ？？顔？？  
陰キヤだって友達の前では陽キヤみたいに  
話すし、笑う。

それにしても周りを気にして陰キヤと仲良くしたがらない  
陽キヤの人達は可哀想ね。

一握りの人しか友達になれないんだから。

——なんて言つたつてなにも変わらないけど。

とりあえず私は陰キヤで眼鏡でブサイク。  
でも、夢見たつていいでしょ？？

”オウジサマ”がいつかやつてくるつて、  
私だけを愛してくれる素敵な人がやつてくるつて。

「おい、榎真穂。」

友達との喋りながらの昼食中。

そう呼ばれて扉の方へ視線を送ると  
桜路サマこと、  
オウジ

桜路雅人が立っていた。

この人は不良で有名（？？）で、

何よりかつて良くて、女子にモテまくり。  
たけど女嫌いらしい。

…それが私を呼んでる？！

ナイナイ。

しかも、このクラスには榎麻由つて言つ可愛い子が居たはずだ。  
(あーお菓子食べよ。)

と思って鞄を持ち上げたとき、

「無視すんなこのやうう。」と言つて

桜路が私の腕を掴んで歩き出した。

いやいやいやいやいやー

人の視線に目を伏せながら、

”人違ひ！！” ですけど？！

しかも女嫌いですよね？！

一人心の中でツツコミを数回繰り返して着いたのは屋上。

「ちょっと待つて！！人違ひ人違ひ！！」

ボツコボコにされそうな予感がするつー！  
と半泣き状態で叫ぶ。

「は？？お前榎真穂だろ？？」

「そうですけど、私何もしてない！！

榎麻由つて子の間違ひじゃないですか？！」

必死も必死。

こつちは平和に生きてきたんだよーー。  
何かあるわけもないだろ？！泣

「いや、お前だけじ。」

「えーっ

死刑判決決定。

アーメン。

ここは土下座か？！  
と思い、  
座ろうとしたとき。

「おい、お前。

ー俺と付き合え。」

「… what??」

月会え？？突きあえ？？憑きあえ？？付き合え？？

「あつ、ああーーはいはいーーどこへ行きましょうかーー？」

「いいんだな？？」

「はいっーーなんなりとーー！」

「だつたら俺を雅人つて呼べ。」

「はあ…？？雅人様」

「様はいらねー。」  
“彼女”なのにおかしいだろ。

( ^ - ^ ; ? ?

「……もう一度お願ひします。」

「は？？彼女なのにおかしいだろつてんだよ。」

「何が」

一  
様  
づ  
け

「誰が」

は？？

一  
彼女  
て  
誰  
？  
？

一  
お前

「…付き合えってそういうち?」

-は？？

両手を急いで地面に付ける。

「申し訳ありません。意味を取り違えましたっ！？」

「何でも奢ります！！何でもします！！」  
彼女だけは

「知らねえ。取り消し不可」

ガーン

「そんなん……」

その後半泣きで説得したけど……

無理でした。泣

「おい、真穂行くぞ。」

強制連行。拒否権なし。

毎日昼ご飯と一緒に食べるという拷問。  
廊下での周りからの視線（とくに女子）。  
今絶対死ねる……

「どうして私なのよ……」

バカらしくて敬語もやめた。

「秘密」

そういうながら私の卵焼きを勝手に食べた。

この人はいつもパン。

一回弁当作ろうかと思つたけど  
それこそ彼女みたいでやめた。

「女嫌いじゃないの？？」

「お前以外はな。」

全然嬉しくねーよ。

逆に私だけが嫌いの方が嬉しいんですけど? -.

「どうして嫌なんだよ。」

「…陽キヤがうるさくなるでしょ。」

陰キヤは陰キヤで平和に波をたてず生きたいのよ」

そう、陰キヤって言い訳にも使えるよね。

大体は自分が陰キヤだと思つてもないみたいだけど。

「陽キヤ陰キヤなんて誰が決めんだよ。」

「知らない。」

そつとお弁当をなおそつと  
鞄の中の物を全部出していく。

「なんだこれ?..?」

「何つて小説。恋愛小説」

「本なんて面白いか?..?」

「この本は主人公が好きになる男の子  
超タイプで超格好いいの!-!」

「…どんなやつなんだよ。」

「格好良くて、運動神経抜群、秀才、強引だけど優しくて、自分を分かってくれて、いつも守ってくれる人」

「ふんつ。現実そんなやつ居ないだろ。」

「だから良いんじやない。」

絶対現実にはそんな人私の前に現れないから。」  
そう言いながら立ち上がりスカートをはらい、  
フェンスの方へ向かう。

「そう、現れないから、  
夢見てるだけ。」

そう呟いた私の声はきつと聞こえてない。

## 眼鏡と不良？

「頭いた」

一緒にご飯を食べるという拷問から解放された私はフラフラと頭に手をやりながら廊下を前もよく見ず歩いていた。

ドンッ

かどで人にぶつかった。

結構な衝撃に片方から崩れ落ちしりもちをついた。

「うわあ！！」「メン大丈夫？？」

と謝ってくれる男の子に大丈夫！！こつちこそ「ゴメンね」と、とりあえず笑顔で返事をした。

手探りで眼鏡を探す。

ボンヤリとしか見えなくて時間はかかったけどようやく見つけた眼鏡は折れてつけれなかつた。だけど当たつた人を見るために目にあてた。

私と目があつた途端どもりながらもう一度謝つて走つてどこに行つてしまつた。

それを不思議に思いながら壊れた眼鏡をブレザーのポケットにしまつて教室へ向かつた。

人がよけて行く。

それに気づかず私は自分の席に着くと

斜め後ろに居るだらつ智恵ちゃんに「智恵ちゃん次なんの授業だつけ？？」と聞いた。

「…」

「…」

「智恵ちゃん？？」

返事の遅さに疑問を持つた私はブレザーから眼鏡を取り出しつつ前にようつに並んで周りを見た。

「？…」「？…」「？…」「？…」

「？！」

何故か私の周りに人が集まつていて  
一様に驚いた顔をして私を見てる。

「あ…ほちや…ん？？」

「智恵ちゃん…なにこれ？？」

自分の席にいつも通り座っていた智恵ちゃんを見つけた私はそう聞いたけど、

智恵ちゃん自体もボケーッとして返事をしてくれなかつた。

その時鳴つたチャイムでみんなが覚醒してどこかへ行つてしまつたけど、

その日はなにか違う視線を感じた。

私は同じクラスの一一番格好いいと言われる男の子に声をかけられた。

疑問を感じながら会話を進め終わるとまた違う男の子が声をかけた。

それが終わったかと思つと次はギャルが私を囲つてきたのでそれは言い訳をつけて逃げてきた。

（なんなのよ…）

いつもとの違いに気持ち悪くなつた私は友達を捕まえて問いただした。

「だつて、真穂ちゃん眼鏡取つたらす”い可愛いからビックリしたよ！…」

といった友達になんとか呆然としてしまつた。  
眼鏡を取つた自分の顔は腐るほど見ていたけど  
他人には見せたことがなかつたかもしれない…

そう思いながらの帰り道。

結局人は”顔”なわけ？！と怒りが沸いてきた。

性格が変わつてなくても顔が変わつたら人の態度が変わる。

「そんなに可愛くないわよ！…」  
鏡の前の私に怒鳴る。

…あの男がいきなりあんなつたのもやつと分かつた。

「結局人の顔なのね…」

私は鏡の自分を睨み付け拳にぐつと握りしめた。

## 眼鏡と不良？

ざわめく教室

他のクラスからの野次馬。

先輩や後輩関係なくある教室に集まっていた。

2・Aは朝からずっとこの調子だった。

それもそのはず。

昨日までブサイクで気にもとめてなかつた女の子が見違える程可愛くなつてたのだから。

その噂の張本人は視線に気付かないふりをして本を読んでいた。

(最ツ低)

眼鏡を修理しているという理由とつけずに行つたらどうなるかと思つてやつてきたが、

180。変わつた周りの反応に気分が悪かつた。

「のけ。なんでこんなに人が多いんだよ。

ツチ！…おい、真穂行くぞ！…」

いつもお昼のお呼びだしが聞こえた。

「はあ

ため息だけをついて俺様野郎の前に立つ。

「おー！…真穂どこにいんだよ…早く来い…！」

ともう一度俺様野郎は吠えた。

「あんたどこに田があんのよ……田の前に居るでしょうが……」

「……は？？お前誰だ。俺が呼んでんのは神真穂だよ。」

「その神真穂ですけど。」

「は？？」

「だから私が神真穂！！！」

目を見開いて俺様野郎は私を凝視する。上から下を舐めるように見て最後もう一度私の顔を見て、自分のおでこに手を当てて俺熱上がってきたわと一人呟いて出て行つた。

「？！」

あまりの行動に止まつたままの私に周りの男子が誘つてきたけど私は無視して屋上で一人で食べに出て行つた。

（なにあの態度！！）

ムシャクシャしてワインナーに箸を刺して考える。  
(顔じやなかつたの？！)

謎は解けない。

そしてその後2日俺様野郎は私を呼ぶことはなかつた。

イライラしながら帰ること3日目。

あまりに来ないから呼びに行こうかと思つたけどなんだか自分が待

つてゐるみたいで止めておいた。

そんな今日はちよつと帰りが遅くて道が暗くて怖いと思つていた。

「お姉ちゃん一人??」とよく聞く定番のナンパの一言が私の耳に聞こえたとき、  
(やつぱり...)と内心ため息をついた。

すいません。彼氏と待ち合わせしてるで、と言しながら通り抜けようとしたけど、  
やつぱり無理だった。

掴まれた腕をおもいつきり振り払つたのが癪に触つたのか、  
もう一度掴まれて薄暗い路地に連れ込まれて  
両手を両手で拘束されて首筋に男の唇が触れそうになつたとき。

ドスッと横から音がして男が倒れた。

勿論掴まれていた私も倒れそうになつたとき、  
私のお腹に腕が回つて後ろから抱き寄せられた。

「俺のだつての」

そう聞こえたときやつと自分が声が出ないことに気が付いた。

逃げていく男を見て力が抜けていく。

「大丈夫か??」

座り込んだ私の前へ回つてきて顔を覗き込んでそう聞いたのが後だつたか先だつたか。

私は抱きついていた。

「ちょつ！！」

「私に抱きつかれてしりもちをついた俺様野郎は驚いたよつて声をあげたけど、最後は私を抱きしめてくれた。

「2日もどうして来なかつたのよ！！」とグズリながら言つた私に、風邪で学校休んでたんだよ。それを知らせる方法もなかつたしな。といつつかメアド交換を拒否したことの嫌みを交えながら言つた。

「何？？カウントしてたわけ？？」とやけに嬉しそうだつたから気まずくて顔を逸らした時、

首筋に唇が触れた。

「ちょつ！！」

急いで離れる私の真つ赤な顔を真つ直ぐ見て  
どうして眼鏡してねえの？？と聞く。

修理に出して取りに行つてないだけつ！－－といいながら  
おしゃりで後退して私の両手を捕まえて次は近寄ってきた…

眼鏡と不良？（後書き）

ちゅうと区切ります( ^ - ^ ;

## 眼鏡と不良？

一気に近くなつた顔。

「眼鏡返つてきたら学校に絶対付けてくれ」と

ギコツと皿をつぶつていた私はそう聞いて皿を開けるとまだ至近距離で見つめられていた。

「返事は？？」

そう聞かれてコクコクと頭を縦に振つて離れようとした。

…そう、したけど後頭部を拗つよつて持たれたと思つたら頭がついていた。

（何がつて…聞かないで泣）

自分より熱い唇。

制止の声も抵抗もあつてなつまつなもの。

なんかのハリウッド映画ばりのキス。

（いや、まじ食われるかと思ったよ…汗）

くつたつとあいつの肩にもたれかかった私の首筋を唇でスッとなぞる。

「ちゅう…すとつぱすとつぶ」

まだもたれかかったままなんとか腕をあげあいつのおでこに手を当

てる。

「ほり…熱あるじやん…」

顔を覗き込む。

真つ赤な顔に少し潤んだ目  
…限界だつたらしい。

私の方へ倒れ込んできたつ…！

「ちよつ…！」

勿論抱えきれるはずもなく。

一緒に倒れ込んだ。

「ちよつとお願い…！」一回起きて…！」

なんとか起き上がつたその脇に自分の腕を差し込んで  
フタフタしながらも歩き始めた。

「ちょっと…家…」？？

「…」

「はあ…」

今日は厄日か？！調子乗つた罰か？！

半泣きになりながら、

田の前にある自分のマンションへ向かった。



熱？

（いつも押しに弱かつたのだろうか…）

ベッドに落としたといつもがいによつた感じで私はその熱い体をベッドに寝転がせた。

赤い顔にいつもより元気がなさげにおりた髪の毛が幼く見せている。いつもとは違う印象をうける。

そんな病人を見てときめいている私は変態なのだろうか…

いつもは突っぱねているのに来なかつた2日は寂しいといつも足りないというか、

なんだか違うよつに感じたのは事実だった。

（…キスだつて、いや…じゃ…なかつたし…）

そう考えて顔が赤くなつたのが自分でも分かつた。

そう…！この人と違つて慣れてないだけ…！そうだ、そうだ…！…と言ひ聞かせていた時、寝返りをうつたのを見て病人だつたつ…！…と、急いで氷や薬を取りに行つた。

「ちょっと…薬飲んで。」

と私はベッド腰掛けて揺り起こす。

でも全然起きないのにため息をこぼす。

（明日が土日で良かつた…）

そう思いながら頭を膝の上に乗せて口に薬を入れて水を飲ませる。

額を触るとまだ熱くて苦しそうだった。

額のタオルを変えて大分落ち着いて寝ているのを確認してお粥と私のご飯を作る。

(まだ寝てから起きてからでいいか。)

もう一度ぐりすり寝ているのを確認して私はお風呂へ入った。

／＊＼＊＼＊＼＊＼＊＼＊

「んっ」

俺が目を覚ますといつもと同じ天井の色が見えた。  
寝返りをうつてもう一度布団を鼻まで持つてくるといつもとは違う匂いがした。

ズルツと額から何かがずれ落ちた。

「？？」

うつすら目を開けて見ると、

何秒かして自分の部屋じゃないことが分かった。

「？！」

とりあえずクラクラする頭を抱えながら、扉を開けてドライヤーの音が聞こえる扉をノックする。トントン

「…」

トントン

「…」

トントン

「…」

（一応ノックはした。）

俺は扉を開けて数十秒目の前の物をただ呆然と見て、目があつて…扉を閉めた。

「やべえ…」

熱とかとは違う意味の顔の熱さに右手で顔を覆う。

（いや、パジャマ上だけの危うさ + 風呂上がり…やべえ。）

そんなんちやつかり見てた俺は変態だろ？

「まじでやべえ…」

もう一度眩いで天を見上げた。

熱？

（ありえないっ！）

髪の毛も生乾きのままズボンをはき、頭をかかえて座り込む。

怒りよりも恥ずかしさが勝つて

立ち上がり見て見た鏡の中の私は真っ赤な顔で、どうせなら新しいお気に入りのが良かつた…と考えてブンブン頭を振る。

（普通は怒る感じでしょ…）と自分に言い聞かせて、文句を言つてやうと鼻息荒く扉を開けた。

「ちょっと…！なんで開け…ん…のよ…って大丈夫？！」

開けてすぐ座り込んでいるのを見つけて思わず駆け寄った。

慌てて両肩に手を当てて揺さぶると赤い顔に虚ろな目で私を見た。

熱上がつたんじやない？！と額に手を当てたら

うわあと言つて赤い顔がもつと赤くなつて後ろにひっくり返つた。

「…ちょっとほんと大丈夫…？？」

～\*～\*～\*～\*

訳分からなさそうに不思議そうに首を傾げるのをチラッと見て顔をそらす。

（パジヤマ…）

もつ泣き声にななりながらどこかに行つた足音を聞いて手を手に当ててため息をつぐ。

突然横から抱きしめられるよにかが掛けられた。

手を口から外して見ると、

前に真穂が居てタオルケットについているボタンをとめてくれて、

「お粥温めるから」

そう笑顔で言つてリビングへ行つてしまつた。

また顔が赤くなるのが自分でも分かつた。

その後食べたお粥は美味しかつたし、シャワーも借りて歯ブラシも借りた。

色違ひの歯ブラシが2つ並んだのが同棲みたいでニヤニヤしてしまつた。

で、今の状況。

ベッドには俺、その下の床には真穂。

どんなに言おうが風邪が長引いたら困るの一言で片付けられた。

「なあ、真穂変わるって

「…」

「真穂…？」

「はあ……」

寝てしまつた人を動かすのもな…  
そう考えて止めたけど、  
やっぱり真穂の匂いのする布団は精神的にヤバい。  
さつき寝たのもあつて悶々と一人考えていた。

夜中、真穂が立ち上がりどこかへ行つた。  
トイレだつたらしくすぐ帰つてきた。

さすがに眠くなつてきついた俺はもう半寝ぐらいでその音を聞いて  
いた。  
すると、横から布団に真穂が入つてきた。

「……真穂？！」

びっくりして真穂の方へ体を向けると抱き枕のよつて顔をすり寄せ  
て抱き付いてきた。

（そう言えば抱き枕を抱いて寝てたな……）

そう思い出してため息をついた。



熱？

「ん…」

抱き枕に顔をすり寄せで、  
自分と同じ匂いと自分より温かにぬくもりに一度寝てしまつて、一度抱き締めなおす。

「ん…」

突然私の上から声がした。

「ん… 真穂…」

次は名前付きで。

（声があの…）

「…」

「…」

「…」

（声…）

私はまだ全然開いてない目で上を見る。  
(なんか顎がある…)

そう思つて頭を下りして目を閉じた。

(…。顎…顎?…)

一気に覚醒した頭でもう一度上を見た。

まるで私の額にキスするような角度と距離。

…あいつが私を抱きしめて寝ていた。

私は状況について行けず、

「…」たつぱり三秒止まって絡めていた足と抱きしめていた腕をほどいて、

田の前の胸を押して距離を取った。

「うひひひひひひひ…」

外れないあいつの腕の中で抜け出せりと歯をよじつてみたがり田ひ

すると逆にぐいと抱き寄せられて、

田の前にはあいつの鎖骨。

私は慌ててあいつを離すこ起こした。

寝ぼけたままあいつはまだいついうなつたか理由を言った。

そして爆弾を落とす。

「一夜を回りベッドで寝ぼつたね。お

「…？！？！？！そそその言い方は語弊がある…。」

「だつてほんとじやん。

もう付き合ひつかないね。」

「はあ？？」

「だつて俺真穂のタイプぴったりだし。

頭も学年五位以内。体育も出来るし、優しいし。」

「…優しいなんて自分で言わないでしょ。」

「あと、ずっと好きでいる」ととせつてあげるつてのも付けて。

「？！」

「俺超優良物件じゃん。」

「あいつは暴れる私をいとも簡単に捕え私の頬を包んで俺もう三年お前に片思いしてる。と顔を真剣に見つめて言った。

強制的に会わされた田線に気まずくて下を向く。

「なつ」

「最近ダチに氣づかれて絶対大丈夫だからって太鼓判おされてやつ

と呟つたらまさかの拒否だし。」

「…」

「俺あれでもショックだったんだけど。」

「…」

「どうしてくれんの…?」

「…つ知らなーつー!」

「真穂、つも合つてよ。」

「…いやだつーー!」

「俺を見て。」

「…」

「俺を見て。」

恐る恐る田線を上げる。

そして私は一番重要なことを聞いた。

「なんで私なの??"

～\*～\*～\*～\*～\*～\*～\*

桜が舞う入学式前。

入学説明会に俺は来ていた。

親から離れた学校を選んで春から一人暮らし、  
家出自然に出てきた俺だから説明は俺が聞かないといけないという  
ことで一人で学校に来ていた。

推薦で入ろうと真っ黒な髪。

ダチも居なければ知り合いも居ない。

だけど噂はまわってるらしく俺に気づいたやつは驚いた顔をして道  
をあけていく。

ちょっと喧嘩が強いだけ。

それだけなのに周りは腫れ物のように扱つて、  
顔がちょっと良いからって近づく男と女。

（めんべくせえ…）

やっと終わった説明会。

校門前で大声で慌てて居る女が居た。

「無いっ！…生徒手帳が無いっ！…」

半泣きで探し回る女。

下に田をやると俺の前に生徒手帳が落ちていた。

「おい、これ落ちてたけど」

座り込んだ女がゆっくりと俺の方を向いた。

「…「わあっ！…ありがと」「ねこますっ！…」

涙目で俺を見たその女は満面の笑みに変わった。

ドクン

思えばこれが一田惚れという感覚なのかも知れない。

このあと何年もこの女の姿を田で追いつけることになるのだから。

～\*～\*～\*～\*～\*

「えーっ！ あの王子様あんただつたの？！ ？！ ？！ ？」

「王子様？？」

「お礼言いたかったから探してたのに見つかなくて…」

そう言い終わるのが早いか手で顔を隠して格好良かつたのに…と呟いた。

「…何が言いたいんだよ。」

「あんたは目立ちすぎな上に女子にはモテモテ、そのくせに女嫌い。その女嫌いの好きになつた人な私は眼鏡の冴えない子＝恰好の攻撃対象。

あー 考えたくもないっ！」

頬にあつた手が離れて解放されたと思つたら

クルツ

手首を掴まれてあいつに覆い被さりれるよつとなつた。

「ちよつと…」

「…」

怒った顔で見下ろすあいつに冷や汗が出来上がる。

「…なによ？？」

「俺はお前が俺を好きか嫌いか聞いてるだけだ。」

「？？」

「どうか聞いてる。」

「え…」

そう問い合わせとて一転笑顔に変わり、  
まあ、俺のこと好きでしょ。と呟いた。

「は？？」

「じゃなきや、こんな状況にはなりねーよな。」といやこと笑つ。

「…退いて、退いてよつ…」

自分の状況を思い出してもがくと、  
急に脣の上に人差し指を置いて私を黙らせた。

「俺は真穂しか好きじゃない。」

周りが何か言うんだつたらずつと一緒に居ても黙りせる。

何も言わせない。」

「つ

「俺のこと嫌いじゃないでしょ？？」

そう言つて近づいてくる顔。

私は自然と目を閉じた。

なかなか降つてこないキスに恥ずかしくて目を開けるとあいつは微笑んでまだ目の開いている私に今度はちゃんとキスをした。

「もう俺帰るわ。」

朝ご飯を食べたあいつはそう言った。

「あつ、うん。バイバイ…雅…くん…」

そう言つのが精一杯で私はすぐ扉を閉じた。

私には難しそう

こんな恋をしたこともなければ、恋人なんて何年前…しかも彼氏…  
まあ、彼氏はイケメンだし。  
でも一応女嫌いだし…浮気は大丈夫かな。

火照る頬を冷やしながらお皿を洗つてたらインターフォンが鳴つた。

「はーい」

ガチャ

「どちら様です…か」

「よつ」

現れたのは服を着替えたあいつだった。

「…あんた早くない??」

「いや、知らなかつたんだけど、家隣だつたから。」  
そう言って隣の部屋を指差す。

「…」

「真穂??」

「いやーつ…!」

そう叫んで扉を閉めようとしたり足を突っ込んで阻止され、その足で扉を開けて入つてきた。

「真穂ちゃん あんたじやないでしょ??」

そう楽しそうに私に詰め寄つてくる。

若干どころか超弓毛氣味で逃げ出さうとした腕を掴まれ、またあの腕の中。

その後は名前を呼ぶまで出してくれなくてついでに大好きもつけられて出れたのは日が暮れそうな時間だった。

それからあいつとは授業中以外はずっと居て行き・帰りも一緒に友達もその周りもなにも言わなくなつた。

あの時の王子様は変わってしまった。

だけどずっと待つてた”オウジサマ”が現れた。  
ずっと愛してくれるつて言う”桜路様”が。

白馬に乗つてなくてもいい。

優しくなくてもいい。

強い手で私を引っ張つて守つてくれたら。  
ねえ、いつもは言えないけど。  
ずっと愛していくね。  
：私も大好きだよ。

そう小声で毎日言いながら、

何故か毎日寝にくるあいつにくるまれて、  
寝ているあいつの唇に触れるだけのキスをした。

## 孤独？

私はその横に並ばない。

私は絶対戻らない。

——私は絶対頼つたりしない。

そう決心した筈なのに…

私は高校に入つて学校に行けなくなつた。

今まで何も問題のない生徒の一人、少女Aだつたのに  
この日を境に七瀬綾という固有名詞に変わり、要注意人物になつた。

一番端の一番後ろ。

それは私指定席になり。

いつも集会で後ろに居る子。

それは私を指す言葉になつた。

早退も多くなり、

そのたび自分の出来なくなつたことを思い  
誰も居ない家、分かつてくれない家族

一人涙した。

私は一人だつた。

友達も上辺だけ、

信じられるのはお金だけ。

つて言つてもバイトもしてないからお金は無いけれど。

皆から一歩引いて傷つかないよう、  
誰も入れないように、  
バリアを張ったのは私なのに。

——寂しいと思つのは自分勝手だ。

(ああっ)

急にくる不安。

自分を自分では保つては居られない。  
震える手、回る感覚、息苦しい世界、

渴く喉。

思わず膝に手をついて自分を支える。  
耐えれず止まつた電車から私は出た。

「はあはあはあ」

トイレに急いで駆け込む。

これが今の私だ。

それは突然やつてきた。

もうこうなつて一年、

最近はまだ安定してたのに

…どうしてだろう。

私はこれ以来電車に乗れなくなつた。

それでも乗らなければいけない。  
朝は送つてもらつても帰りは特に。

（どうしていつも嘘がつけないのだろう。）

私はただ”普通”の子になりたかった。

何か飛び出たことがなくていい。

何も誉められることがなくていい。

ただただ”普通”で親に心配もかけず、

弟にだけ注意してられるような存在感がないような安心出来る子に。

多くを望んでなんかいない。

なのにどうしてそれさえも叶わないのだろう。

お母さんからの電話。

ただ一言”大丈夫”とどうして言えないの？？

どうして河野のメールで本当のことを言ってしまったの？？

――結局私は誰かに心配して欲しいのかも知れない。

河野篠也

高校三年で彼氏だった人。

正直言うと好きではなかった、

けど押しに弱い私と付き合えば好きになるんじゃないかといつ気持ちで付き合つた。

結局1ヶ月しか保たなかつたけど…

原因は私が正直じゃないからあいつの正直さに慣れなかつたからだろつ。

そんな私を未だに好きなのだから本当に頭がおかしい。

学校も違ひ忘れるだらうと思つていたら  
メールがきて、ちょっと返信したら  
調子に乗つて毎日のようにメールがくる。  
気分屋の私だから少々うざいが何気に中学が一緒だった人とメール  
してるのは河野だけだつたりする。

――弱つた私に声を掛けてくれるのは河野だけ。

そんなとこから私はポロッと弱音を言つてしまつたのかも知れない。

## 孤独？

涙の一粒ずつ強くなれたらいいのに。  
私達は泣いて泣いて泣き終わって、  
やつとムダなことだと分かる。  
何一つ強くなつてないことに…

なのに…

なのになんで涙は意志ではコントロール出来ないものなのだろう。  
なんで自分でコントロール出来ないものばかり自分にあるんだろう。

(もうダメっ)

10分も乗れず私は電車を降りた。  
学校からの帰り。

私は降りた駅のホームの冷たい椅子に座りて  
上を向いて涙を堪える。

季節は変わり吐き出す息が白くなる  
冷たい季節。

私を一人にする季節。

堪えられなかつた涙がコロリと頬を滑り落ちた。

(河野…)

こんなときだけあいつにすがりつきたくなる。

私に気づいて降りてくるとか

偶然居ただとか。

どうしてだろう。

こんなとき見つけて欲しいのは河野だけ。

私はズルい女だ。

こんなときだけ河野に電話したくなつて、  
こんなときだけ助けて欲しくて。

…いつも突っぱねてるのは私なのに。

涙を拭くけど足は震えて立てそうにない。

助けて…そう言えたら楽なの??

誰かに助けを求めたらいいの??

それで何か誰か助けてくれるの??

私にも昔は友達が居た。

他の子と仲良くしてるのが嫌だつたぐら  
い私は元々嫉妬深い方だ。

だけど友達にしても恋にしても、  
いつからか執着しなくなつた。  
まるでそれを忘れたかのよう。  
そして好きという気持ちも

友達というカテゴリーも小5で忘れた。

「綾つて秘密主義者よね。」

そう友達に言われるようになった。

ただ私は何かを言つて周りにどう思われるか分からないうことが怖くて言わないようになつただけだ。

——だって人も言葉も変わつていくものでしょ？？

”絶対”という言葉も信じない。

”頼つて”という言葉も信じない。

——それが私を守る方法だから。

## 孤独？

周りはゆっくりでいいと言つけれど

”何が”私を待つてくれるの？？

”誰か”側に居てくれるの？？

時間も、

単位も、

人も、

自分も、  
何も…待つてはくれないじゃない。

——それに気づいたのはいつだっただろう？…

相変わらずの毎日。

朝送つてもらう車すら怖くなつて、  
例の発作が出た。

それは今までよりも強く。

疲れ果てた心と体。

——全てを捨てられたらいいのに。

全てを投げ捨てられたら。

そんな勇気なんてない。

楽しみだった校外学習もバス移動で、  
こんな状態の私にはとてもじゃないけど行けなかつた。

(「この調子じゃあ修学旅行も無理だらうな。」)

最近思つこと。

部活も辞めて、

校外学習も行けなくて。

私はみんなとの思い出をどこで残せるのだろう??

この三年間で何が残せるんだろう。

なんとか帰った家の中。

／＼

テレビから悲しい歌が流れる。

私も歌いながら…何故か私は泣いていた。

怖い。

漠然と、何かが怖く、

そしてとてつもなく寂しい。

それが私の思つてる誰にも言えない  
全てなのかも知れない。

何かに頼らないと決めたのはいつだつたか。

それが”永遠”に続くことはないと、

幼心に思つたから。

どうせ無くなつてしまつ物なら、

初めから求めなければ傷つかない。

無駄な期待もせずに済む。

”永遠”という言葉を信じない。

”永遠”の終わりは明日かも知れないから。  
そんな不確かなものは要らない。

なのになんで…

私が求めるものは”ずっと”が付く、  
不確かなものばかりなんだろう。

いつだったか。

河野が言つてくれたことがある。

”頼ればいい。”と、

私は笑つてそんなキャラじゃないと言つたら

”キャラとか関係ないよ”って

——信じていいかな??

ずっと側に居てくれると。

寂しいと言つていいかな??

独り座り込む私に手を差し伸べてくれる??

なんて思つだけ、

臆病な私はきつとその手を取らない。

きつと知らない振りをして顔を伏せたまま

強い腕が欲しい。

私を有無言わせず引っ張る強い腕が、  
その腕で私を遠くへ連れてつてくれたらしいのに。

どうして生きてるの。

どうして生まれてきたの。

どうして…生きてなきゃいけないの。

どうして朝が来るの。

死ぬ勇気なんてないくせに  
死ねたらいいのに。

——そりできたらどれだけ楽だろう。

私はきっとこう思って明日も生きていく。  
そして死ねないまま一日が終わって、  
そしてまた朝が来て絶望するんだろう。

私は独り不幸な悲劇のヒロインのよう。  
自分が作り出した世界なのに、  
自分独りが不幸だと思う可哀想な子だ。

それでも自分では掴めない”永遠”を思い描いて  
幸せな自分、  
有り得ない現実を思い描いて毎日眠りにつく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1727x/>

---

はじまる恋。

2011年11月23日16時54分発行